

# フロストの詩における視点の転換について

## Frost's View on the Importance of Changing Our Perspective

山 津 さゆり

Sayuri YAMATSU

### 1.

私たちは怠惰や我執のため、一つの視点でしか物を見ず、そのため沈滞状態に陥る危険がある。そうならないために、私たちは視点を転換して物を見る必要がある。

フロストの詩の中には視点の転換の重要性を説いたと思われる詩がある。

まず“The Vantage Point”「有利の地点」という詩を見てみよう。

木に飽きてまた人間を求める時

夜明けに行くところを一よく知っている、

牛が空き地にいる丘陵地だ。

そこで垂れたビャクシンの中に横たわり、

私は自分は見られず、見るのだ白い色ではっきり

遠くに人の家、さらに遠くに

反対側の丘の人の墓、

生きている人死んだ人、好きな方を見る。

そして昼までにこれらを見すぎたら、

腕をついたまま向きを変えようと、どうだ、

日に焼けた丘の側面で顔がほてる

私の息が微風のようにトキワズナを揺らす、

私は土の匂、いたんだ植物の匂をかぐ

私は蟻の穴をのぞきこむ。<sup>(1)</sup>

Richard J. Calhounはこの詩について次のように言っている。

最初の8行は人間の家や墓場から感情的に超越している。後の6行はのめりこんでいる。この詩の話者は体の向きを変え自分を取り巻いている自然の要素を感覚

---

(1) Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost* (London: Jonathan Cape, 1972) 17. フロストの詩の引用はすべてこの版に拠る。日本語訳は拙訳である。

的に経験している。<sup>(2)</sup>

こういう見方もあるかもしれないが、私には視点の転換の必要性、あるいは視点の転換の喜びを歌ったもののように思われる。本論では、このような視点の転換の重要性を歌ったと思われる他の3篇の詩、“The Lesson for Today”, “Carpe Diem”, “The Figure in the Doorway”について考察してみたい。

## 2.

“The Lesson for Today”「今日のための教え」はフロストと中世の詩人との対話という形で書かれている。161行から成る長詩で、8連から成っている。

まず、1連ごとに要旨を述べておく。

1連目は以下の通りである。

今は悪い時代だと言う人がいるが、私は気にしない。暗黒時代だと言われている中世の詩人たちも自分たちの時代が悪いとかいうことは気にせず、詩作に専念した。

2連目は以下の通りである。

自分が生きている時代のことはよくわからないものなのだ。それなのに統計などを持ち出して今の時代は悪いと言う人たちがいる。私は賛成出来ない。だからといって私は統計など信じないというような神秘思想家ではない。

3連目は以下の通りである。

中世と今の時代を比べてどちらが悪いとも言えない。中世では人々は神に支配され、今は科学に支配されて、人間はちっぽけな存在になっている。

4連目は以下の通りである。

死や魂の問題は中世にもあったし、今もある。人間は不幸である。しかし不幸を声高に嘆いてはならない。慎み深くすべきである。これが「今日のための教え」である。

5連目は以下の通りである。

死や魂の問題は中世や今に限ったことではない。哲学者も一般的なことしか言わず、役に立たない。

6連目は以下の通りである。

この問題はどの時代にもあることで、簡単に解決出来るものではない。中世も今も、どの時代も暗黒時代だ。

7連目は以下の通りである。

人間はいつまでも生きられるわけではない。目的を果たせずに死ぬ。墓参りをして死者を悼むとしても、自分もいずれ悼まれることになる。

---

(2) Richard J. Calhoun, “The Sonnets of Robert Frost at the Millennium,” *Roads Not Taken*, ed. Earl J. Wilcox and Jonathan N. Barron (Columbia and London: University of Missouri Press, 2000) 230.

8連目は以下の通りである。

私は今の世のことについて文句をつけてきたが、それは世の中を愛するからだ。

このように要旨を辿ると、「今日のための教え」というのは、不幸であっても慎み深くすべきだということであるが、そういうことが出来るためには、自分の時代のこと、自分のことしか考えないというのではなく、視点を変えて、比較したりして物を見ることが出来なければならないということであろう。

次は1連ごとに詳しく見てみよう。

1連目の最初の4行は次のように書かれている。

私たちが住んでいるこの不安定な時代が  
賢人たちが言うのを聞くように本当に暗黒でも、  
そして彼らが本当に賢人だと私が確信しても、  
私は今の時代を激しく呪いはしないだろう。

賢人たちと言っているが、フロストは実際は愚か者だと思っている。今の時代が悪い時代だと言う人たちは愚か者だとフロストは思っている。最初から皮肉たっぷりである。

賢ぶった人たちを相手にしないでいられるのは、フロストが視点を変える方法を知っているからである。フロストは、暗黒時代と呼ばれている中世に住んでいたが慎ましく詩作に専念していた詩人たちと語ることが出来るのである。

フロストはこの1連目の中で次のように言っている。

私は1万ページ昔の  
世界の議論の余地なく暗い時代に返り、  
私の中世ラテン語を引き出して、  
詩人たちと対話、共通の目的、兄弟愛を求めよう  
（自由主義的なものすべてにかけて—そうする、そうする）  
この詩人たちは生まれるのが余りに早くもあり  
余りに遅くもあるという運命を静かに受け入れ、  
この為に偉大になれなかったのだ。

これらの詩人たちは時代が悪いとか言って騒ぎたてることなく黙々と詩作に励み、偉大な詩人にはなれなくても、詩の進歩に貢献したのだ。

フロストは「自由主義的なものすべてにかけて」と言っているが、自分は民主主義の国に住んでいて自由主義的なものを身につけているので、封建制の中世の詩人たちとも大らかに付き合うのだと言っているのであろう。

「そうする、そうする」「I should, I should」と繰り返して言っているが、これは詩脚韻を合わせるためであらう。詩の作法に厳しい人は品がないと言うかもしれないが、フロストの「遊び心」<sup>(3)</sup>の現れと言うことも出来よう。

“The Road Not Taken” には次のような詩行がある。

Two roads diverged in a wood, and I—

I took the one less travelled by,

この場合は、“and I” の “I” は脚韻を合わせるために使ったのであろう。

2 連目では、中世の詩人たちの中の一人に対して語りかけるという形で詩が書かれている。フロストは次のように書いている。

時代のせいということは充分あり得る

貴方がウェルギリウスのように有名になれなかったのは。

しかし貴方がそんな主張をするのを聞いた者はいない。

完全に時代の下に居て時代を判断出来る

知識があると貴方は思うまい。それが私の主張だ。

上に引用した詩行の中で終わりの 2 行は特に重要である。賢ぶった愚か者は自分が生きている時代のことがわかっているように言いふらす。自分の時代のこと、自分のことしか考えない者に適切な判断が出来るはずがない。

フロストは続いて次のように書いている。

何が狂っていて自分たちの詩や弁明が

貧弱になっているのか正確に知っている人々が

今日居るし彼らの名前を言うことも出来る。

彼らは大きすぎる状況を多すぎる社会的事実で

つかもうとした。貴方も私も

恐れるだろうもし余りに多くの悪い統計を

理解し飲み込んだら

私たちの筋肉は二度と縮まらないだろうと、

決して人間の形を取り戻せないで、

心がぼかんとしたまま一生を過ごすか

哲学的膨張で死ぬだろうと。

そう感じるが一私たちは特別な神秘思想家ではない。

この部分の内容について考える前に、最初の 3 行の文章構造について少し述べておきたい。

フロストの文章は口語体で書かれているからわかりやすいと思っている人が多いかもしれないが、この 3 行の中には文語体でもあまり見かけないような文章構造が使われている。

We have today and I could call their name

Who know exactly what is out of joint

To make their verse and their excuses lame.

---

✓ (3) 拙論「フロストの遊び心」(『経済理論』第 320 号, 和歌山大学経済学会, 2004 年) を参照されたい。

“have”の目的語は“Who”の前に省略されている“those”「人々」という1語である。“Who”が先行詞の人々という語を含んだ関係代名詞と考えることも出来るかもしれない。「今日こうこうという人々がいる」という部分はそれでわかるだろうが，“and I could call their name”というのが挿入的に入っているのだからわかりにくくなっている。

文章構造ではないが，“out of joint”という慣用句にも注意しなければならない。これはシェイクスピアの『ハムレット』の中の一節に由来するもので、その中に“The time is out of joint”という台詞がある。フロストは「何が狂っているか」と言っているが、実は「時代が狂っている」と言う人々がいるということが言いたいのであろう。そのようにはっきり言わないで、匂わせるだけで済ませているというのはフロストの技巧である。視点を変えて、他の時代と比較することも出来ないで自分の時代が悪いからよい詩が書けないなどと言って、時代のせいにするような人々を、フロストは非難している。

すでに内容に関わるようなことを述べたが、フロストがこの部分で一番に言いたいことは、統計などを持ち出して今の時代がどれだけ悪いかを主張する人々がいるが、こういう人々は世の中の害になるということである。

詩のこの2連目は、「彼らは大きすぎる状況を多すぎる社会的事実でつかもうとした」という詩行で終わってもよかったのである。人生をいかに生きるか、詩人としてどのような詩を書けばよいのかなどは大きすぎる状況である。これを、社会的現象を解明すれば解決出来ると思ったら大間違いである。「社会的事実」と言っただけではよくわからないだろうと思って、フロストは統計のことを持ち出したのであるが、かえって読者、批評家を混乱させることになったように思われる。だが、フロストは「遊び心」で始めから混乱させるつもりで、「貴方も私も恐れるだろう」という詩行から以下の詩行を書いたのだと考えられないこともない。“You and I / Would be afraid”以下の詩行は、“We have today”から“lame”までの詩行と比べると、文章構造はありふれた簡単なものである。“Would be afraid”と“if”の間に接続詞の“that”を補ってみれば、もっと簡単になるかもしれない。

内容はどうかであろうか。余りに多くの、また余りに難しい統計を与えられると、頭が混乱して、体の調子も悪くなると言っているだけなのだ。それだけ言えばよいのに“get outside of”という語句を使ったものだから混乱が生じるのである。“get outside of”というのは「飲み込む」とか「食べる」と言う意味の慣用句である。時には「理解する」という意味にもなるようだが、フロストは「飲み込む」、「食べる」という意味にとってもらいたいと思っているように思われる。余りに多くの統計を飲み込んだら腹もふくれ体もふくれてしまい、心もふくれてまともに働かなくなるというのであろう。だがそう言った後、フロストは言いすぎたかなと反省する。それがフロストの良い所である。人を責めるだけではいけない。自分のことも反省しなければならない。これも視点の転換である。フロストは「特別な神秘思想家ではない」と最後に付け加えるのである。「神秘思想家ではない」というのは、統計など全く

信じないわけではないということに過ぎない。“philosophical distention”とか“mystics”という言葉に惑わされて、難しい思想的なことを論じているのだと思う人もいるかもしれない。

Katherine Kearnsは次のように言っている。

「自由主義者」の話者は、その意見においてフロストでもあるしフロストではないとも言えるが、中世の詩人との対話を作り出し、その中で世界的時間的視点を持っていると主張する人々を軽蔑している。画期的真実を見ることが出来るほど大きな人は“外に出る”必要があるというのだ。これは「すべての啓示<sup>(4)</sup>は」というような詩の啓示的な晶洞石の内部とは全く反対の方向である。

この指摘は、“get outside of”の“outside”だけに着目して独断的な解釈を述べている印象を与える。フロストに「遊び心」があって、読者を混乱させてやろうという気持ちがあったとしたら、その計略に見事にはまってしまったということになるかもしれない。

3連目は次のように始まっている。

私たちは私たちが行動する時代を評価できない。

だが愚かでも冗談に振りをしてやってみよう

今は悪い時代だと知るのに充分なことを知っていると。

1行目で大事なことがまた繰り返されている。2行目の「愚かでも冗談に」と訳した所は“for the folly of it”という英語であるが、これは“for the fun of it”や“for the hell of it”と同じような意味で使われているのであろう。

この後9行は余り目新しいことは言っていないように思われるが、その後の「いつも残念なことがある、汚い平和か凶暴な戦争かがある」という言葉に注目したい。このことは中世についても今の時代についても共通して言うことができるというのであろうが、「汚い平和」というのは見事な表現である。戦争と戦争との間の束の間の平和はまともな平和ではない。

1行置いてまた重要なことが述べられている。「すべての信仰の基は人間の苦しみである」という言葉である。これも中世についても現代についても言えることである。この世に苦しみというものがないのなら何の問題もないのだ。1行置いて「不当なことしかない、／こう付け加えてもよい、詩人に残された道は、／その呪いをどう受け止めるか、悲劇的か喜劇的かだと」と述べられている。フロストは喜劇的に受け取る方の詩人であろうが、悲劇的に受け取る詩人より、かえって悲劇的かもしれない。

中世にも現代にも同じ人間の悩みがあるということを言った後、それでは中世と現代とではどこが違うかという話しになる。5行置いて現代の悩みについて次のようなことが述べられている。

空間が私たち現代人を悩ます、私たちは空間で病んでいる。

---

(4) Katherine Kearns, “The Serpent’s Tale,” *Robert Frost*, ed. Harold Bloom (Philadelphia: Chelsea House Publishers, 2003) 185.

空間を見ると私たちは微生物の短い伝染病の  
ように小さく見える  
よいレンズで見るとこの天体の中で最も小さなものの  
緑青の上を這っているのが見えるかもしれない。

これは宇宙の中で人間がいかに小さな存在であるかを見事に表現した文章である。現代のこういう状況を考えると、中世より現代の方が悪い時代だと考えられるかもしれない。

しかしそうであろうか。1行置いて次のように述べられている。

貴方たちは神が足で踏むのも嫌がるような  
最も卑しい蛆虫におとしめられた、  
言葉は違うが同じことになる。  
私たちはどちらもおとしめられた人類だ、  
一方は神と比べて一方は宇宙と比べて。

「神が足で踏むのも嫌がるような」というのは痛烈な表現で見事と言うほかない。「足で踏みつける」と言うだけでも相当にひどいことなのに「足で踏むのも嫌」というのだから、これ以上の侮辱はない。

1行置いて結論的に次のように述べられている。

僧院の聖人と天文台の聖人は  
ほぼ同じ不満に慰めを得ている。  
だから科学と宗教は本当に一致する。

「僧院の聖人と天文台の聖人」という巧みな表現で始まる詩行は、一見両者を讃えているようだが、言いたいことは、中世と現代はどちらの方が悪いということはなく、どちらも同じく悪いということである。視点を転換する力を持たないで自分の時代だけを見て、今は悪い時代だと主張する人たちへの見事な反駁である。

4連目は中世の詩人が武者修行者たちのために授業をするという想定で話しが進められている。詩人は「さあ、ああ悲しいという意味のラテン語を学ぼう」と呼びかける。「ああ悲しい」というのは英語では“alas”，ラテン語では“cheu”となっている。

これを悲しい言葉だと思ってはならない。人間の世界はいつの時代も悲しみに満ちている。だから悲しみにどう対処するかは人間にとって最も大事な問題だと言ってよい。だが詩人は続けて「今日のための教えは不幸でもいかに礼を失しないようにするかということだ」と言う。不幸だ不幸だと言い立てて周囲の人を困らせるようなことをしてはならないのだ。自分だけが不幸なのではない。自分の時代だけが不幸なのではない。視点を転換する力を養って慎み深くしなければならないのである。人はいつも“memento mori”という言葉をおぼえておかなければならない。他の人も死ぬし、自分も死ぬ。皆不幸なのだ。自分だけが不幸だと思ってはならない。



フロストはこの節の終わりに次のようなことを述べている。

この世は魂を救うには難しい所だ、  
国家統制の下に置き、  
私たちすべてが自動的に救われることが出来れば、  
この世と天との別離はなくなるだろう。  
すぐに天国になるかもしれない。  
(多分次の千年にはそうなるだろう)

「この世は魂を救うには難しい所だ」というのはその通りで、まじめに言われたものだが、その後に続く詩行は、この世では魂を救うことは出来ないと簡単に言えばすむのに、奇抜な考えを5行も使って書いたものである。フロストの「遊び心」の現れであろうが、突飛すぎるようにも思われる。文章構造について言えば、“So automatically”の“So”の後に“that”を補って考えるとわかり易くなるかもしれない。

5連目は短く、次のようになっている。

だがこれらは一般的なことで、一つの  
時間、場所、人間の集団に限られてはいない。  
私たちは無であるか神の後悔の種かのどちらかである。  
哲学者が集まる時はいつもそうだが、  
彼らはどこへ達しようと強く望むにせよ、  
どの特殊点から理論を始めるにせよ、  
彼らは哲学者で、昔からの習慣で  
一般的な全体像に行きつくだけだ  
どんな兎にも劣らず非独創的なものだ。

最初の2行では大事なことが述べられている。人間の悲しみ、魂の問題などは時代、場所、国などに関係なく、同じものなのだ。視点の転換が大事である。3行目は虚無的に過ぎるように思われるが、その通りかもしれない。4行目以下は哲学者は役に立たないと言っているようだが、役に立たないのは哲学者だけではないかもしれない。

Katherine Kearnsは4行目以下のことについて、次のように指摘している。

「一般的な全体像に行きつく」というのは空虚の中、アリスの兎の穴に落ちた  
ということだ。そこでは「真理」といっても幻覚的であり、「英知」といっても  
制度化されることによって砕かれたものとなる。<sup>(5)</sup>

フロストが「どんな兎にも劣らず」と言っているのにつられて、しかもそれらを発展させて「アリスの兎の穴」とまで言っている。フロストの「遊び心」の罠にかかったと言うのは

---

(5) Kearns 186.



言いすぎであろうか。フロストが“rabbit”という語を使ったのは2行上の“habit”と韻を合わせるためのもので深い意味はないのではなかろうか。

6連目も短いもので、全体的におどけた調子で書かれている。フロストは中世の詩人と議論をするという形でこの詩を書いてきたが、実際は中世の詩人が言ったことになっている所もフロストが言ったことだと当たり前のことを言っている。だが中世の詩人を利する形で言っている。このことは国王にも伝えてもらいたいと、おどけて言っている。中世の詩人には「自由主義者」という言葉の意味はわからないだろうが、フロストは自由主義者で相手を尊重するから、議論をしても相手を勝たせるような形でする、このことは国王に誓ってもよいと言っている。そして国王にもし会ったら貴方の墓碑銘を読みましたと言おうと、またおどけて言っている。ここで墓碑銘という言葉を出したのは次の節で墓場や死のことを話すためのきっかけにするためであり、話の進め方がうまいと言えるかもしれない。

全体的におどけた調子で書かれていると言ったが、この節でも拔かりなく大事なことも言われている。

この連の最初の行で、「魂のことではどの時代でも同じだ」とフロストは言っている。また6行目、7行目では、「すべての時代は同じ暗さで輝いている、／貴方の時代も私の時代と同じように暗い」と言っている。「同じ暗さで輝いている」というのは撞着語法で面白い表現である。

7連目では墓場を訪れたという想定で話が進められている。15行目から18行目までに次のようなことが書かれている。

私たちは皆生きながらえて  
国家の何らかの発展に注目し、  
科学や発明がどうなるかを見たいとしても、  
私たちの命の長さには限りがある。

フロストが、国家がよくなるという希望を持っていたのか、科学や発明が人間の幸福に役立つような方向に進むことを期待していたのかどうか、この詩行だけではわからない。

この後、フロストは、人間はすべて目的を果たさず死んで行く、国家も、民族もそうだ、地球も無意味に終わってしまうかもしれないと言う。そしてこのようなことを嘆く文学者もたくさんいるが、フロストはそういう嘆きを軽蔑すると言う。終わることを恐れたり、悲しんだりしても仕方がない、精一杯生きることが大事なのだと言いたいのであろうか。フロストの不屈の精神、樂觀主義を表す言葉とも考えられる。

25行目からこの節の終わりまでは次のように書かれている。

人が亡くなったこと  
好機を逃したこと、最高の状態に達しなかったこと、  
富や、名声や、愛を得られなかったことを私が嘆いたとしても、

誰にも劣らず私も嘆かれる立場になるのだ。

私は他の人々と同じく自分の不完全さを受け入れる。

人間は誰も祝福されないことを神は喜ぶがよい。

「誰にも劣らず私も嘆かれる立場になるのだ」という箇所は、原文では“On me as much as any is the jest.”となっている。ここでは“jest”という語が使われているが、“The joke is on ~”という慣用句が基になっている。それは、「～が仕返しを受ける」という意味である。

フロストは自分だけは別格の人間だという態度は取らない。自分も他の人々と同じく死んで行く人間であり、不完全な人間だと言っている。これも視点を転換する力を持っているから出来るのである。最後に神のことを言っているが、言わなくてもよかったのではなかろうか。

8連目では、自分の墓碑銘を書くとしたら「私は世界を愛するが故に文句をつけてきた」というものにするとあって、この長詩を終えている。

時代の中に居て、その時代を判断することは出来ないのに賢ぶって時代が悪いなどと言う人を詩の始めで笑ったが、笑いたいためにそうしたのではないのだ。この世界がよりよくなることを願ってそうしたのだと、フロストは言いたいのであろう。

この長詩から、フロストは国家が少しでも立派になること、科学や発明が人間の幸福に役立つものになることを願っていたということを読み取ることが出来るように思われる。フロストが視点を転換する力を持つ必要性を説いたのも、それが人間の幸福につながると思ったからだ、と、解釈することが出来る。

### 3.

次に“Carpe Diem”という詩を考察してみたい。

老人は二人の子供が静かに

たそがれ時愛しながら通りすぎるのを見た、

家に向かっているのか、

村から出ているのか、

(鐘が鳴っていたが) 教会へ行くところかわからなかった。

(知らない子供だったので) 老人は

二人に聞こえない所へ行くまで待って

幸せになってくれと言った。

「幸せに、幸せに、幸せになって、

喜びの日をつかんでくれ」

長年の主題は年寄が考え出したものだ。

年寄りが詩に

バラをつめという主題を押しつけたのだ  
警告のつもりだった  
恋人たちが  
幸福にあふれ  
圧倒され幸福を持っているのに  
持っている気付かない危険があるからだ。  
だが人生に現在をつかめと命じるのか。  
人生はいつも現在より  
未来にあり、  
その二つより  
過去にあるのだ。現在は  
感覚にとって多すぎ  
混雑しすぎ、混乱させすぎ—  
現存しすぎ想像も出来ないのだ。

“Carpe Diem”という言葉は「今をつかめ」、「今を楽しめ」という意味を表し、ホラティウスの詩に由来するもののようである。「今を楽しめ」ということで思い出されるのはヘリックの「乙女たちへの忠告」という詩である。「出来る間にバラをつめ」という行で始まり、時間は飛ぶように過ぎ去って行くから若い時を無駄にせず、早く結婚するがよいと乙女たちに忠告している。

フロストのこの詩の老人はフロスト自身でもあろうが、若い恋人たちに賢ぶって忠告しない。恋人たちに聞こえないように「幸せになれ」と言うだけである。

フロストはこの詩の中で、「バラをつめ」というのは客観的に過去を振り返ることが出来る年寄が言い出したものと反省している。ここで視点の転換が行われているように思われる。フロストは当事者である若い恋人たちの視点に立って、現在起こっていることは当事者にはわからないのだから、老人の視点から「バラをつめ」、「今を楽しめ」と言われても当事者にとっては無理なのではないかと言っている。普通の人であれば、「今を楽しめ」という伝統的な考え方をそのまま受け入れるであろうが、フロストはそうしないで深く考えたのである。そして私たちの視野を広げてくれたのである。

George F. Bagby は、「心が経験の意味をも理解出来るようになるのは少し距離をおいてからにすぎない、主として記憶と瞑想による<sup>(6)</sup>」と言っているが、年を取って初めて「若い時幸せがあった」と思えるように、若い時は一生懸命生きるしかないのである。フロストは、若者たちに、過去、未来を大事にするために、若い現在を前向きに生きてほしいと願っている。

---

(6) George F. Bagby, “The Promethean Frost,” *Robert Frost* 111.

一瞬、一瞬を前向きに一生懸命生きてきたフロストだからこそ、このような視点を転換させた新しい若者への「教え」を綴ることが出来たのであろう。

4.

ここまで“The Vantage Point”「有利の地点」，“The Lesson for Today”「今日のための教え」，“Carpe Diem”「今を楽しめ」を吟味しながら、これらの詩の中で、視点の転換がいかに大事であるか、またそれがいかに人生の喜びにつながるものであるかが語られていることを考察してきた。最後に、視点の転換には観察力、想像力も必要であることも示唆されていると思われる詩，“The Figure in the Doorway”「戸口の人物」を紹介して結論としたい。

坂を越え、列車は高い所を走っていた  
平らな山の所で目に見えるのはただ  
低いオーク、低いオークそしてオークの  
幹が大きくなるのを妨げている土の欠如だけ。  
しかし単調さの中を走っている時、  
生きた人間がいる所へやって来た。  
ひよろ長い姿は小屋のドアの上まで届いていた。  
家の中の床の方に倒れたら、  
奥の壁まで届いたに違いない。  
だが通りすがりの私たちには倒れるのは見えなかった。  
彼はどこからも何マイルも離れた所に住んで  
いるのにそれに耐えられるようだった。  
彼は微動だにせず立ち、厳しい感じでやせてはいても、  
それは必ずしも欠乏のせいではなかった。  
熱と光のためにはオークがあった。  
鶏が一羽、豚が一匹見えた。  
井戸もあり、雨水もためていた。  
横10フィート縦20フィートの畠もあった。  
ありふれた楽しさも欠けていなかった。  
思うに私たちの通りすぎる列車がその役目を果たしていた。  
私たちが食堂車で食事をしているのを見たり、  
その気になれば手を伸ばして挨拶も出来た。

この詩は場合によっては「列車に乗っているのを見られることについて」という副題がつけられていることもあるが、その場合は詩を読まなくても視点の転換ということが述べられていることが察知出来るであろう。見るほうが優位に立っているどころか見られて見世物に

なるのである。見る方は反省し、謙虚にならなければならない。列車から人物が見えたのは一瞬のことであつたであろうが、観察力の鋭さ、想像力の豊かさという点では、見る人、フロストのすぐれた点も見逃してはならない。